

同窓会

ニュース・レター

第1号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2003年3月20日発行



同窓会総会・懇親会のお知らせ

日時 2003年5月5日(月・子供の日) 午後2時~5時
場所 センチュリークラブ大阪 (Tel.06-6449-1411)
会費 10,000円

〒550-0001

大阪市西区土佐堀1-3-7 肥後橋シミズビル16F
地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」3番出口より土佐堀通り沿いに3分
地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」4番出口より土佐堀通り沿いに15分

ふるってご参加ください。

同封の返信用葉書にて出欠のご返事をお待ちしています。
また同封の振替用紙にて会費1万円をお払い込み下さい。



会長あいさつ

石原 実



↑プロフィール
昭和二年英文学講座卒業。文学部同窓会設立から現在まで会長。株式会社石原時計店取締役社長。

私が入学したときは、法文学部と言って文字通り(文字通りではなく経済が抜けているが)法学部、経済学部、文学部の三学部が一つになった寄合所帯であった。校舎は旧制浪速高等学校校尋常科の建物であり広いとも言えないところでの寄合所帯生活ならぬ授業であった。文学部(正式には法文学部文学科)は約三十名でそのうち、英文学は十名程度。ずば抜けての人数である。それはともかくとして、講義の絶対数が少ないので、法科や経済の学生が歴史や文学の講義を聞きに来ていたようである。おかげでその連中とも顔なじみになったりして楽しい半年であった。半年というのは、入学が昭和二年九月で翌二四年の三月には二年生(二回生?)である。と同時に晴れて法文学部より独立して、文学部となった。思い出せば半世紀以上の前の話であるが、楽しかった青春の日々であった。

研究科長あいさつ

河上誓作



↑プロフィール
昭和四二年大阪大学文学部英語学専攻修士課程修了。文学博士。平成元年より文学部英語学専攻教授。平成十三年より研究科長。「文の意味に関する基礎的研究―認識と表現の関連性をめぐって」『認知言語学の基礎』他の著書。

二十一世紀を迎え日本の大学はいま大きな曲がり角に差しかかっています。国内外のさまざまな深刻な問題が、学問と教育、思索と語らいの庭としての大学に怒涛のように押し寄せてきています。そして、大学を見つめる社会の目もかつてなく厳しくなっています。

文学部もこうした困難な課題に立ち向かうべく、ここ数年真摯に改革の努力を続けてまいりました。一九九九年に大学院重点化を終え、二〇〇二年度は「二十一世紀COEプログラム」で人文科学の世界的な拠点校のひとつに選ばれました。文学部が中心となって「大阪大学総合学術博物館」も発足にこぎつけました。

とはいえ平成十六年度に国立大学法人化を控え、文学部・文学研究科にもこれまでにもまして大きな社会的役割と責任が求められています。そうしたなか、同窓会組織の充実と強化が、これからの文



学部・文学研究科の発展に不可欠のものとなってきています。社会の各分野で目覚ましい活躍をなさっておられる同窓会の皆様の、力強く熱いご支援を今後ともお願い申し上げます。

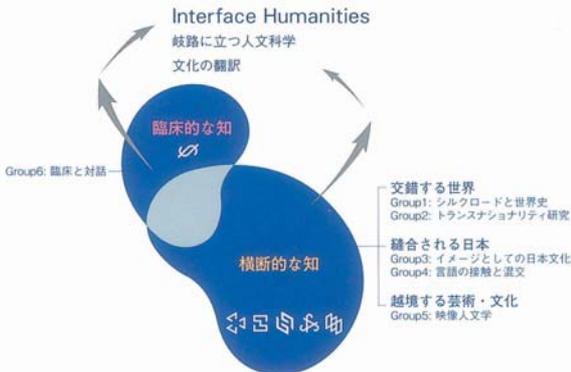
とりわけ、同窓会のネットワークを充実させ、卒業生・修了生の就職支援の輪を広げていただけることを切にお願いたします。

文学研究科文学部の最近の動き

COE《インターフェイスの人文学》プロジェクト

同窓会のみならず、昨年度より文部科学省で、全国の大学・研究所を対象に「二十世紀COEプログラム」というプロジェクトが進められているのをご存じでしょうか。それぞれの学問領域でその研究の世界拠点となりうるような部署を選び、巨額の予算を投入して、研究を「気に活性化するとともに、次世代の国内外の優秀な若手研究者を育成する」というプログラムです。本学文学研究科は、人間科学研究科と言語文化研究科との協力を得て、これに応募し、人文科学分野で採択数二十件のうちの二つに選ばれました。わたしたちが推進することになったのは《インターフェイスの人文学》というプロジェクトで、現代社会・文化の問題を、インターフェイスの相対研究するというものです。つまり、ひとつの社会と別の社会のあいだ、ひとつの社会のなかの複数文化のあいだで起こる侵蝕や摩擦、軋轢や衝突というところに着目して、その接触によって起こる諸問題を構造的に分析してゆくというものです。このプロジェクトは、二つの理論研究と、四グループにわたるモデル研究群からなっています。理論研究は「岐路に立つ人文学」、モデル研究は「交錯する世界」「縫合される日本」「越境する芸術・文化」「臨床と対話」と題されています。テーマごとに、これまで講座というかたちで組織されてきた各研究分野を横断するようなかたちで

研究チームが作られています。さまざまな国際シンポジウムなども企画されており、新聞などにもそのつど広報いたしますので、現在の文学研究科がどのような現代的な課題に取り組んでいるか、ちよっとのぞいていただければ幸いです。(鷲田清二)



埋蔵文化

文学研究科に、埋蔵文化財調査室という小さな組織があることをご存じですか。

豊中キャンパスのある待兼山は、「枕草子」や「新古今和歌集」などにも登場する由緒ある場所として知られていますが、地中にはさ



跡が多く眠っています。一九八三年に理学部の東でラジオアイソトープ総合センターが建設された際、弥生時代中期紀元前「世紀」の集落跡が発見され、同年、キャンパスを含む一帯が待兼山遺跡として国の遺跡台帳に登録されました。遺跡内では建設工事に先だつて発掘調査を行う必要があります。その調査業務を担当するために全学の合意によつて一九八六に設置されたのがこの埋蔵文化財調査室で、以来、キャンパス整備と文化財との調整をはかってきました。一九九七年からは、工事に伴う発掘調査を手掛けるかたわら、利用計画の策定が急務となつている旧医療技術短大跡地の文化財分布調査を四ヶ年にわたつて実施し、弥生時代から奈良時代にかけての遺物や遺構を多数確認しました。この旧医短跡地には、昨年四月に発足した大阪大学総合学術博物館の建設が計画されています。「とよなか百景」にも選ばれた里山の景観や見つけた遺跡をうまく生かした博物館ができることを願っています。

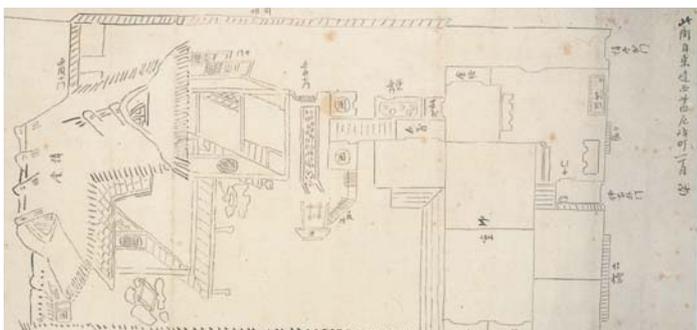
埋蔵文化財調査室は工事に伴う遺跡の調査が本務ではありませんが、このほかに出土資料を活用した公開展示、遺跡の現地説明会、地元小学校での出張授業、公民館講座への出講などを通じて、大学と地域社会との連携を深める取り組みも積極的に進めています。(福永伸哉)

近世大阪の誇り 懐徳堂 (二七二四—一八六九)

懐徳堂が誕生した近世の大坂は、日本の商業と金融の中心地でした。全国各地はもとより国外からもヒト・モノ・情報が集まり、豊かで開かれた市民文化が開花しました。このような近世大阪の文化的実力を、思想・哲学などの学問の分野で代表するのが懐徳堂です。

その歴史は、享保九年、淀屋橋にほど近い今橋三丁目、商人たちが建てた私的な学問所に始まり、開学の二年後には幕府の官許を受け、爾来一世紀半、江戸の昌平黌と並び称される学問の府に成長します。教学の柱は儒学であり、教師たちは主に経書をはじめとする中国の古典を講じました。彼らは門生に「(人は)生まれながらに聖人である」と説き、人間が道徳性や知的な理解力において平等であることを教えました。また、「利は義である」とも述べて、商業を倫理にかなった正しい行為であると肯定しました。町人の学問所であるからこそ生まれたこれらの見解は、結果的には封建体制の枠を超え、近代の思惟を先取りする主張になりました。こうした懐徳堂の学風を反映して、門下からは富永伸基・山片蟠桃ら名高い町人学者が登場します。

懐徳堂は町人たちが学問することを励まし、近代的な「知」を育んだ場所でした。その価値は三百年を経た今日も、失われていません。(竹腰礼子)



研究室ニュース

懐徳堂と中国哲学研究室

中国哲学研究室の関係者には一つの宿命があるようです。それは、大阪大学懐徳堂文庫との関わりです。文庫の根幹が漢籍、特に儒教文献であったことから、初代教授木村英一先生の時代から、中哲にとって懐徳堂は常に身近な存在でした。

この関係は、昨今さらに親密の度を増しています。平成十三年の阪大創立七十周年記念事業で懐徳堂が注目され、いわゆるバーチャル懐徳堂が制作されたのに加え、附属図書館の新設にともなう懐徳堂資料の総合移転、貴重資料の調査・解題執筆、『懐徳堂事典』の刊行、懐徳堂文庫電子図書目録(<http://kaitokudo.jp/>)の公開、懐徳堂データベースの作成、西村天囚『懐徳堂考』の電子化と、研究室をあげたプロジェクトが相次いでいます。この間、多くの関係者の方々に絶大なる御支援をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。地道な活動ではありますが、今後も、皆様の御協力を得て、鋭意取り組んで参りたいと思います。(湯浅邦弘)



研究室風景2003年1月

西洋史研究室紹介

ここ数年間、西洋史研究室は、情報化社会への対応のために、コンピューターの導入、情報教育のための第二研究室の設置などを計画的に推進してきた。最近、研究室を訪れたことのない卒業生は、その変化に驚くであろう。現在、十台のウィンドウズと二台のマックのノートパソコン、一台のデスクトップ型のコンピューターが学生用に開放されている。その他、二台のサーバー(一台はリナックス)とリナックス練習用のパソコンもある。ノートパソコンはサーバーと無線で接続されており、インターネットを利用できるようにしている。また無線LANを使って高速プリンターも利用可能だ。設備の充実だけではなく、ネット上で検索可能なオーストラリア辞典の運用、インターネット講義の実験、授業でのホームページ作成、CDの自動生成ソフトの作成など、歴史における情報技術の利用の可能性を探っている。

このような情報化へ対応の試みは、将来的なカリキュラムの改編への準備でもある。歴史学として必要なITのスキルは何か。それ

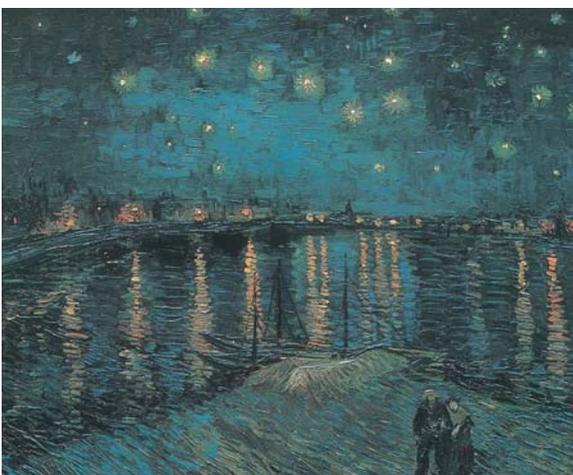


を利用することで、歴史学の領域をさらに拡張し、豊かにするにはどうすればよいか。今後の検討課題は多い。また、ITはすべての問題を解決してくれる万能薬でもない。しかし、知識という情報を操作する担い手を育てる場としては、避けては通れない課題である。

(江川 温)

西洋美術史研究室とゴッホ展

昨年、ゴッホ展(Vincent & Theo van Gogh展)が北海道立美術館と兵庫県立美術館で開かれました。私がゴッホとつながりをして、ファン・ゴッホと画商をしていた弟テオのダブル・ポートレイトを描くという企画で実現。北海道でのファン・ゴッホ展は初めてです。テオについて紹介でき、かつて芦屋に個人宅に所蔵されていた『向日葵』や、神戸に住んでいたテオの息子のことも紹介できましたので、よくある単なる寄せ集め作品展とは違うものにはなったかと思えます。入館者は六十万人を超えましたから、主催者にとってはまずまずの成功。多くの人に見ていただけなのは嬉しいのですが、それにしても、なぜ億単位の巨額の金が動いて、こんなに人も入るのか、というのが正直な感想です。美術市場は冷え気味ですが、展覧会市場は活発。展覧会もこうなるとれっきとした経済活動で、美術史のスタッフはそこに何らかの形で関わっていますが、どれだけ質の高い内容を盛り付けられるかが私たちの仕事になるでしょう。(園寺寺司)



＜ローヌ河畔の星空＞1888年オルセー美術館蔵

卒業生近況

◆天にも昇る心地

池口頌夫

古来人は天駆ける事を夢みて飛行機を發明し、終に宇宙に飛び出した。人類は「天に昇る心地」を死後に訪れる神の国で肉体を離れ軽々と、苦しみも悩みもない世界、押し寄せたる至福感等々で表してきた。現代人も臨死研究の発展から死を宗教的感覚で体験している事が判明した。

宇宙飛行士は何を感じたのか？

自分は確かにあの地球から飛び出した一つの細胞、眩いばかりの青く美しい地球、等であり、前述の体験と似ている。異なるのは帰還後の生命体を守る強烈なエゴ意識である。

平成十二年、私は四十三年間の企業生活に終止符をうった。

十二年間の会社経営の責任、音楽業界代表としての国内外への責務の全てから解放された。

挨拶状で、重くて暗いトンネルの底から突然転びでてまさに異星の地に立つ、と記した。至福感に包まれ、体から重力が去っていった。

その夏、私は家内とスイスを旅した。夕方六時、暖められた気球が何の抵抗感もなく地上を離れフワリと空に浮き、重力の軛を逃れ静寂の世界を上昇した。牧場も村も小さくなり雲も仲間になった。至福の恍惚感。しかし天空の飛行は意外な結末を迎えた。

天使は天降るが、罪深き生命体の私達は「落ちる」ことしかない現実を間もなく悟ることになった。着地の瞬間、船は転倒し、全の天空の圧力をわが身に受け、只ただ重く地に横たわったのである。

今私は三十坪の畑を耕し、無農薬有機栽培に徹し、大地を踏み美しい川と湧水群の保護に汗水を流す毎日です。これもやはり「天にも昇る心地」を二度も味わった者のたどるべき運命なのではないでしょうか？



ープロフィールー

昭和九年大阪生まれ
昭和三二年大阪大学文学部教育講座卒業
(株)講談社(株)ブックローン
(株)キングレコード勤務
元キングレコード会社社長
元日本レコード協会会長
落合川水生公園をつくる会会員

◆「面白そうだからやってみる」の精神

光原百合

私は現在、市立尾道大学にて英語を講ずる傍ら、ミステリー・ファンタジーなどの分野の小説を執筆しています。

思えば在学時代からちよつと変わったことばかりやっております。将来は翻訳の仕事がしたいので卒論も翻訳論で書きたいと主張する。それが済んだら次には言語学的な見地から推理小説を研究すると言いつつ出ず。そこから「名探偵の魅力を探る」というテーマに傾斜してしまいます。あまつさえ自分で小説の執筆まで始める。

私だったらとてもこんな学生の面倒は見られないと思います。しかし英文学研究室の先生方は、いつも「面白そうだからやってみなさい」と静かに励ましてくださいました。

大阪大学で教えていただいた「面白そうだからやってみる」の精神は生涯の宝物として大切にしていきたい。そして教え子にも伝えていきたいと思っております。



ープロフィールー

昭和六三年、大阪大学文学部英文学研究室(英語学講座)を卒業
平成元年、同大学院文学研究科を修了
現在、市立尾道大学芸術文化学部講師
平成十四年、「十八の夏」で第五回日本推理作家協会賞(短編部門)を受賞
著書に「空にかざったおくりもの」「時計を忘れて森へいこう」「十八の夏」等、訳書に「ノアのはこぶね」「祈りの泉」等がある。

◆文学部出身だったから

山田真哉

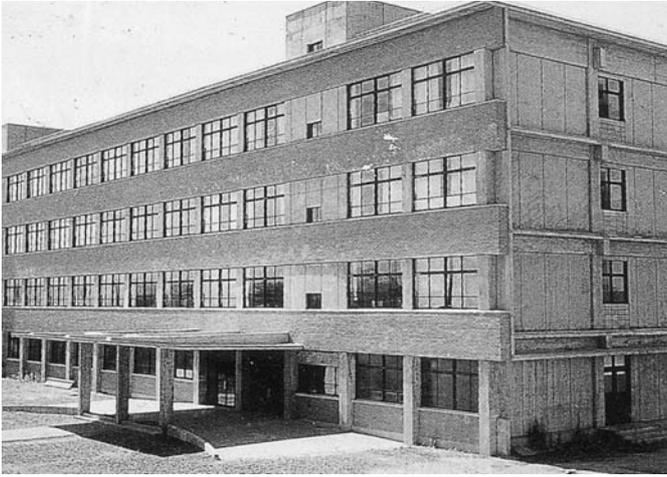
私は一九九五年に入學し日本史研究室に在籍していた者です。大学卒業後は一般企業に就職したのですが、すぐに退社してしまいました。大学にいた四年間、特に社会に通用するような技能を取得していなかったため、無職になった時は途方にくれました。そこで社会に通用するような資格を取ろうと思い、一念発起して公認会計士試験の勉強を始め、幸運にも二〇〇〇年に合格することができました。このときは大学時代に学んだことが切役に立たなかったため、「あの四年間はなんだったんだろう」と思うこともしばしばでした。

ところが会計士の団体で広報委員長になったことがきっかけで、会計士の仕事を紹介する小説を書くことになりました。周りの人間も「山田は文学部出身だから小説が得意なはず」と思ったようです(他学部生からはそう見えるみたいです)。そして二〇〇二年から雑誌に推理小説「女子大生会士」の連載が始まり、二〇〇二年に単行本化、おかげさまでそこそこヒットしベストセラーになりました。小説は書いたことがありませんでしたが、大学時代に無駄ともいえる量の小説や歴史書を読んでいたことがこういう形で生きてきたのだと思います。この三月には「女子大生」の第二巻、夏と秋頃には簿記の世界を舞台にした小説「たまごの国のものがたり」も発売されることになりました。今は会計士の仕事と執筆活動に追われ忙しい日々を過ごしておりますが、研究室や図書館でのんびりと本を読んでいた時代のことをふと懐かしんだりしています。



ープロフィールー

平成11年、大阪大学文学部日本史講座卒業
現在公認会計士
「女子大生会士」の事件簿で話題沸騰

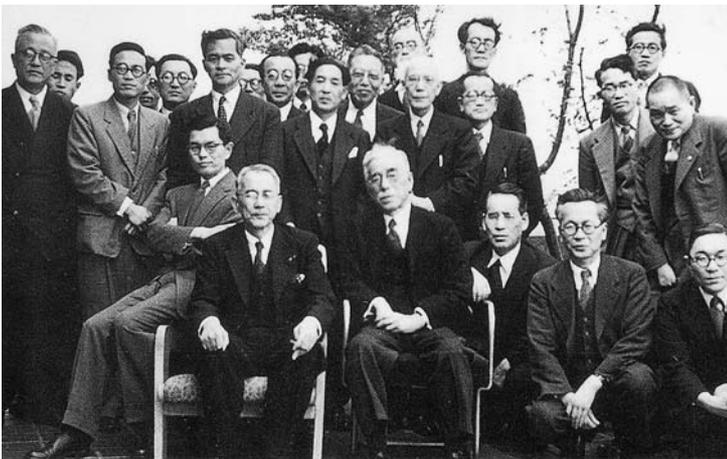


1962(昭和37)年当時の文・法・経共用の建物(現文学部本館)。これは1960年、グラウンドであったところに完成した。その後増築が行われ、1968(昭和43)年に、現在のような「コ」の字型校舎となった。



現在の文学部本館。竣工後40年近くたった今も、増築による継ぎ足しのあとが、外壁の色合いの微妙な違いからわかる。

文学部今昔



1954(昭和29)年頃の文学部教官。腰掛けている2人のうち、右側は桑田芳蔵文学部長。左側は今村荒男総長。



第二合同研究室。火鉢で暖を取っているところが、時代をしのぼせる。1955(昭和30)年頃。



1978(昭和53)3月当時の文学部教官。前列左より5人目岸畑豊文学部長。文学部本館中庭にて。



最後の「ほろよい会」。大津市本堅田の堅田浮御堂横の「魚清楼」にて。「ほろよい会」は、心理学・社会学・教育学が人間科学部として分離した後も、教官同士の親睦を図るため、文学部と人間科学部の教官有志で作った会。1988(昭和63)年12月3日。

文学部の現在の組織

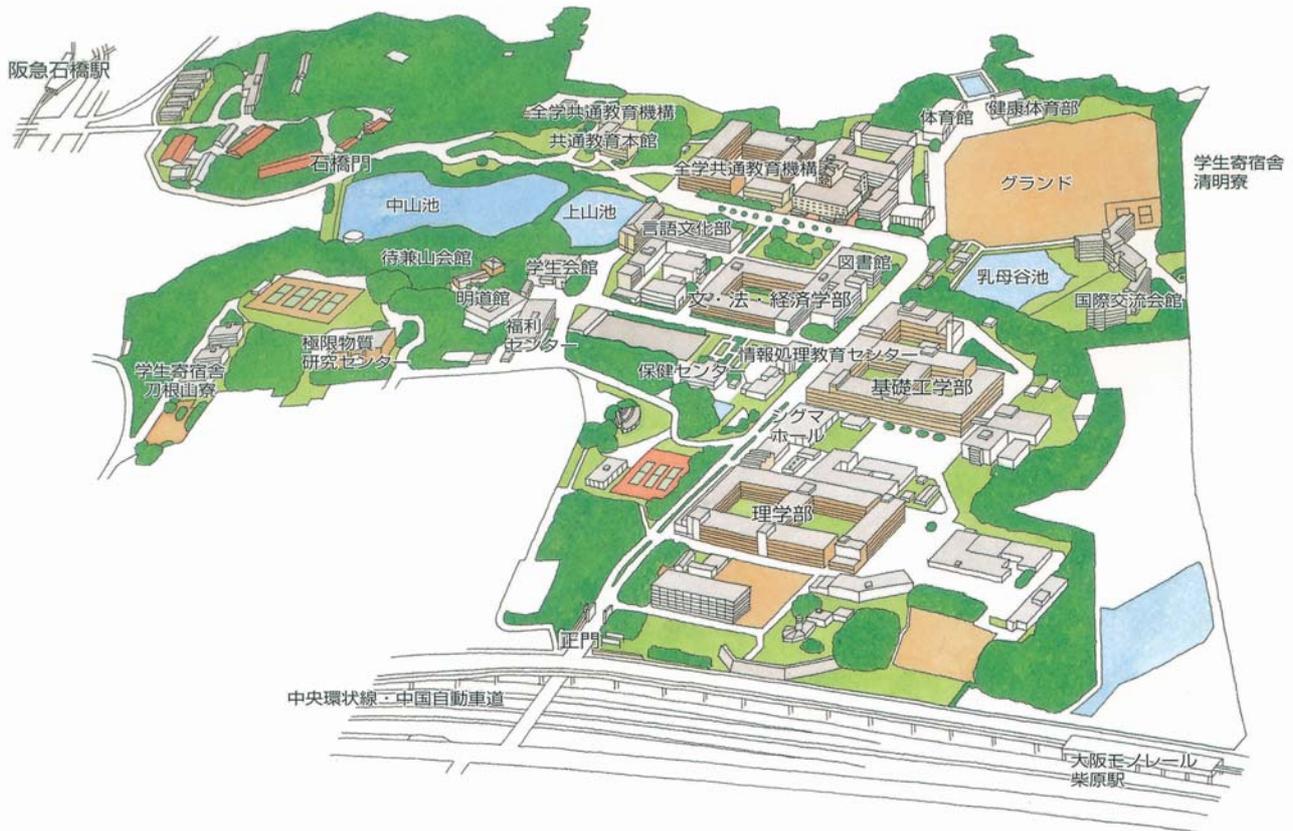
専修	教授	助教授・講師・外国人教師	助手
哲学・ 思想文化学	浅野 遼二 里見 軍之 溝口 宏平 山形 頼洋	入江 幸男 望月 太郎	吉永 和加
倫理学	鷲田 清一 中岡 成文	本間 直樹	紀平 知樹
中国哲学	湯浅 邦弘		佐野 大介
インド哲学	榎本 文雄		天野 恭子
日本史学	猪飼 隆明 梅村 喬 平 雅行 村田 路人		北泊謙太郎
東洋史学	森安 孝夫 片山 剛 荒川 正晴 桃木 至朗	青木 敦	中川 順子
西洋史学	川北 稔 江川 温 竹中 亨	藤川 隆男	
考古学	都出比呂志	福永 伸哉 高橋 照彦	清家 章(兼)
日本学	中村 生雄 川村 邦光 杉原 達	荻野 美穂 富山 一郎	真鍋 昌賢
人文地理学	小林 茂	堤 研二	今里 悟之
日本語学	真田 信治 土岐 哲 工藤 真由美	青木 直子 石井 正彦 渋谷 勝己 木下りか	吉村 裕美

専修	教授	助教授・講師・外国人教師	助手
日本文学・ 国語学	伊井 春樹 後藤 昭雄 蜂矢 真郷 出原 隆俊 金水 敏	飯倉 洋一 荒木 浩 岡島 昭浩(併)	加藤 聰 海野 圭介
比較文学	内藤 高		
中国文学	高橋 文治	浅見 洋二	
英米文学・ 英語学	河上 誓作 玉井 暲 大庭 幸男 森岡 裕一	服部 典之 P.Harvey	好井 千代
ドイツ文学	林 正則	三谷 研爾 J.Nowakowitsch	阪井(三谷)葉子
フランス文学	柏木 隆雄	和田 章男 A.Disson	藤本 武司
美学・文芸学	森谷 宇一 上倉 庸敬 藤田 治彦	加藤 浩	渡辺 浩司
音楽学・ 演劇学	山口 修 根岸 一美 天野 文雄	永田 靖	大林のり子
美術史学	肥塚 隆(兼) 若山 映子 奥平 俊六 囀府寺 司	藤岡 穰	島田 明 吉松 実花
埋蔵文化財 調査室	都出比呂志(兼) 福永伸哉(兼) 高橋照彦(兼) 清家 章		
懐徳堂センター			

(スタッフは2002年4月1日現在)



現在の阪大豊中キャンパス



事務局ニュース

◆二〇二二年に文学部同窓会のホームページがアップしました。同窓会の現状、幹事会の報告などを掲載していますので、ぜひご覧ください。

ホームページアドレス: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou>
 事務局メールアドレス: dousou78@let.osaka-u.ac.jp
 同窓会ニュースレター、ホームページなどの感想はこちらのメールにお送りください。

◆同窓会の名称募集について

文学部同窓会では、同窓会の名前を募集しています。幹事会で提案された項目の中に、「大阪大学文学部同窓会」の名称を改めようという提案がありました。(たとえば「待兼会」など)。そこで後世にも残るような名称を同窓会では募集しております。なお採用者には図書券二万円分を贈呈させていただきます。

◆事務局のスペースについて

日本学棟の一階にデスクとコンピュータを置いて同窓会の窓口を開きました。覗いてみてください。

◆卒業生・修了生名簿について

二〇二二年度に改定された大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿の購入をご希望の方は事務局までご連絡ください。同窓会員に限り販売(四千元)十送料(四百円)でお送りいたします。この機会に改めてご入会いただいた方(入会費万円)には、無料でお送りいたします。ただし残りわずかですので、品切れの場合はご容赦ください。

◆同窓会会費について

同窓会では終身会費とし二〇二二年度より二万円をお支払いいただいております。未納の方はお支払い頂きますようお願い申し上げます。また、ここ数年より以前の会費納入の有無は確認できませんので、お支払いが不明の方は寄付金というかたちでお支払い頂ければ幸いです。いずれも同封の振替用紙で左記の郵便振替口座に振り込んで下さい。

口座番号 09400179043
 加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

事務局のメンバー

事務局長: 林 正則(S四二) 総務: 服部典之(S五六) 会計: 和田章男(S五五)
 企画: 立案: 岸田知子(S四五)、志水紀代子(S四〇)、宮本孝二(S四八)
 広報: 入江幸男(S五二)、大西 愛(S四〇)

平静十四年四月より、アルバイト職員として武内正美さん(英文DC二)にお手伝いをお願いしています。

●住所 大阪大学文学部・文学研究科同窓会: 豊中市待兼山町一番五号 〒560-0853